

この物語は、大野慎子がどのような過程を経てアメリカのディビジョンで活躍するような選手になったのかということと、山梨インターハイで「風」と言われた鶴鳴バスケットが、どのようにして出来上がったのかということに焦点を絞って書いた。

書くにあたっては、できるだけ難しいバスケットボール用語を使わないにしようと思った。初版、初版の改訂版、続編ともに、バスケットボール関係者以外の方々から多数の注文をいただいたからである。もし、どうしても難しいバスケットボール用語を使わなければならないような場合は、カッコ書きで注釈をつけて書くことと思った。しかし、書き進めていくうちに、カッコ書きが多くなって本文が読み辛くなったので、よほど難しいバスケットボール用語が出てこない限り、カッコ書きの注釈は使わないようにした。だから、バスケットボール関係者以外の方には判りにくい箇所があるかもしれない。文章の流れを考えるとそうしなければならなかったのでご容赦願いたい。

書き始めてしばらくすると、「山崎先生がまた本を書いていらっしゃるらしい」という噂が広がっていき、励ましのことばや期待を込めたことばを多数いただいた。その噂は報道関係にも届いており、慎子のこと取材を受けたとき、東京の新聞社のT氏から、「ウチに出入りしている出版社から出しませんか」というお誘いを受けた。自費出版ではなく、商業出版で、しかも東京の出版社から出せるのなら多くの方々に読んでもらえると思い、私はこの話をT氏に一任した。しばらくして返事が返ってきた。

「出せるそうです。でも、大野選手自筆の自伝にしてもらいたいと言われました」

「慎子に本一冊分の文章はかけないよ。それに、書く暇なんかないよ」

「いえ、書くのは専門家がいるそうです」

「すまないがこの話はなかったことにしてくれ」

慎子にインタビューする。それを脚色して、ゴーストライターがサクセスストーリーに仕上げる。それはプロのライターが書くのだから、私が書いたものよりはるかに感動的な物語になるだろう。しかし、そこには脚色して少し曲げられた事実が盛り込まれるに違いない。それはいやだ。

それに私は、この物語には慎子のことだけでなく、鶴鳴モーシオンオフィンスの誕生と結末をどうしても書かなければならない。なぜなら、平成八年以後、「鶴鳴モーシオンオフィンスの基盤は何ですか？」という問いが、全国のコーチからひっきりなしに舞い込んでくるからだ。私はその人たちに、鶴鳴モーシオンオフィンスの誕生と結末をどうしても伝えてやりたいのである。たとえそれがわずか五百人足らずであったとしてもだ。

そういうわけで、慎子のことにはとりわけ熱心で、本当に親身になって奔走してくれたT氏には気の毒だったが、私はこの本を東京の出版社から出す話を断り、地元出版社から出すことにした。

タイトルは当初『続々・チームを創る』とした。が、途中で『大野慎子物語』に変えた。慎子のことだけではなく、鶴鳴モーシオンオフィンスの誕生と結末も伝えるのだから、これまでのシリーズとして、『続々・チームを創る』としても不自然ではないのだが、私自身の苦労話を慎子自身の苦労話より優先させるのはおこがましかったのでそれはやめた。

慎子は、これからますます活躍し、数々の栄光を手にするだろう。しかし、私もいつまでも教え子の活躍に目を細めて喜んでばかりはいられない。生涯現役。それが私のモットーである。二〇〇〇年の元旦、私はひとりでグラウンドに飛び出して行った。そして走りながら思った。

「よし、あの風軍団をもう一度創るぞ」